

都道府県名

宮城県

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	東和町立米川小学校								
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	0	6	11
児童数	16	22	14	18	20	34	0	124	

研究の概要

1. 研究主題

自ら学び，知識・技能を確実に身につけ，学び続けようとする子どもの育成
～個に応じた算数科の指導を通して～

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

・全学年・算数科
児童の学力に差が出やすい教科であると考えたため。

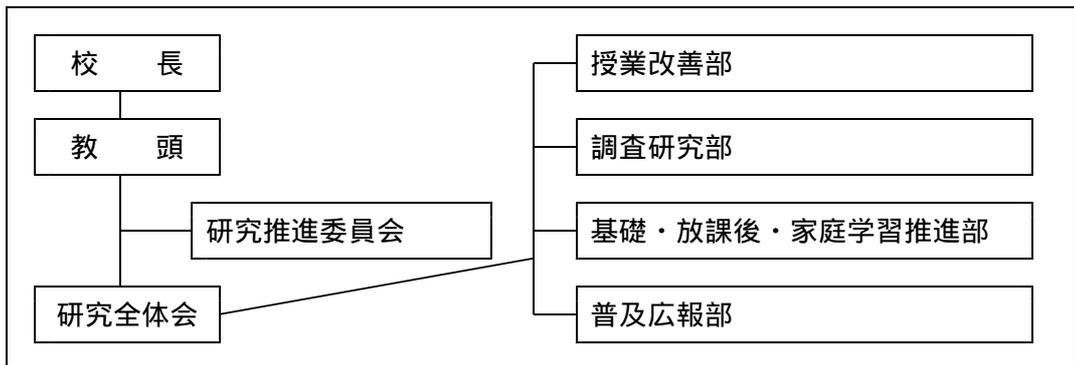
(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>研究目標 算数科において，個に応じたきめ細かな学習指導を4つの視点で行うことにより，自ら学び，知識・技能を確実に身につけ，学び続けようとする子どもを育成する。</p> <p>本校では，具体的な目指す子どもの姿を「知識・技能を確実に身につけ，自ら学習に取り組み，学び続けようとする子ども」ととらえ，「知識・技能を確実に身につける」とともに「学ぶ意欲を高める」ことを中心に研究を行う。</p> <p>具体的には，平成15年度は以下の内容を一つの指標として設定し，平成16年度はさらにそれを高めることを目標とする。</p> <p>【知識・技能を確実に身につける】 ・NRTの検査において，一人一人の通過率を上げるように努める。</p> <p>【学ぶ意欲を高める】 ・一人一人が各調査項目（全7項目，各項目最高値12ポイント，中間値6ポイント）において，1ポイント向上することができるような働きかけをし，全体として特に意識が低い「有能感」（自分は勉強ができると感じる気持ち）「挑戦傾向」（難しい問題にも挑もうという傾向）の項目で，中間値である6ポイントを超えることを目指す。</p> <p>視点1：指導方法・指導体制の工夫改善 教師一人一人の持ち味を生かした「個に応じた指導」の展開（特に個との対話の重視と発問の工夫） TT・少人数指導の効果的活用</p> <p>視点2：評価を生かした指導の改善 学力調査（NRT・学習意欲調査・基礎計算力調査など）の活用 「ぐんぐんファイル」（個人カルテ）の活用 評価規準の継続的な見直し 「観察メモ」（チェックリスト）の活用 「ふりかえりカード」（子どもの自己評価カード）の活用</p> <p>視点3：発展的・補完的な学習のための教材開発 学習プリントの開発 教員の開発</p> <p>視点4：環境の改善</p>
--------	---

<p>学習習慣の育成・伸長 算数ルーム等の活用 掲示物の工夫 「生き生き米川っ子」の発行 ホームページの開設、活用 「家庭学習マニュアル」の配布 学習状況に基づく「個人面談」の実施 「基礎学習タイム」、「わくわくタイム」(子どもの選択学習)の工夫</p>
--

平成16年度	<p>研究目標 算数科において、個に応じたきめ細かな学習指導を4つの視点で行うことにより、自ら学び、知識・技能を確実に身につけ、学び続けようとする子どもを育成する。</p> <p>視点1：指導方法・指導体制の工夫改善 教師一人一人の持ち味を生かした「個に応じた指導」の展開 T T・少人数指導の効果的活用</p> <p>視点2：評価を生かした指導の改善 学力調査(N R T・学習意欲調査・C R T)の活用 「ぐんぐんファイル」(個人カルテ)の活用 「観察メモ」(チェックリスト)の活用 「ふりかえりカード」(子どもの自己評価カード)の活用</p> <p>視点3：発展的・補足的な学習のための教材の開発 学習プリントの開発 教具の開発</p> <p>視点4：環境の改善 学習習慣の育成・伸長 掲示物の工夫 「生き生き米川っ子」の発行 ホームページの活用 学習状況に基づく「個人面談」の実施 「基礎学習タイム」、「わくわくタイム」(子どもの選択学習)の工夫</p>
--------	---

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

- 学習意欲調査と教師の観察から、次の事が成果として挙げられる。

「自ら学ぶ意欲のみなもと」の「他者受容感」(周りから受け入れられていると感じる気持ち)の値が全学年(全体の子どもの43%)で向上した。視点1の指導方法・指導体制の工夫改善の手立て、T T及び少人数指導体制の効果的な活用により、授業中の個別指導の機会が増え、きめ細かな指導に生かされたこと、視点2の評価を生かした指導の改善における手立てなどが有効であったとらえている。

「自ら学ぶ意欲の行動傾向」では、「情報収集」(問題解決や問題発見のために情報を集めようとする傾向)において54.7%、「挑戦傾向」(難しい問題にも挑もうとする傾向)では48.8%の子どもの値が向上した。特に「挑戦傾向」では、中間値の6ポイントを超え、前回の結果よりも平均1.5ポイント向上した。簡単に解ける問題だけを解こうとしていた状況から、難しい問題にも進んで取り組もうとする子どもが増えてきている。

「自ら学ぶ意欲の感情面」の「学ぶ楽しさ」においては、全体の54.6%の子どもが向上し、全学年で中間値である6ポイントを超えた。学習に対して、わかる楽しさを感じている子どもが増えたとともに、授業改善を図った各視点の手立てが有効であったと考える。
- N R Tの結果では、「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」の全領域に

において、通過率の向上が見られた。総合通過率では、全体の81.3%の子どもが向上している。特に「数と計算」では、74.8%の子どもが伸び、平均7.68%の向上となった。

2. 今後の課題

- ・ 学習意欲調査の結果、「有能感」(自分は勉強ができると感じる気持ち)の値が他の項目と比較して、低い結果となっている。前回の値と比較して、全体で0.77ポイント向上はしているものの、中間値である6ポイントには0.47ポイント届いていない。今後、繰り返し学べる機会の保障や確実に自分の進歩に気付かせられるような働きかけの工夫が必要である。
- ・ 「自己決定」(自ら進んで学習しているという気持ち)、「独立達成」(独力で問題を解こうとする傾向)の項目は、それぞれ高い値となっているが、前回と比較しても伸びが見られない。問題解決において、自己決定の場の設定と動機付けについて、工夫を継続していくことが必要である。
- ・ NRTの結果では、「量と測定」「数量関係」において、通過率の向上は見られるものの全国平均との開きがまだある。「量と測定」においては全体の32.3%、「数量関係」では全体の29.2%が下回っており、今後基礎学習タイムの内容を検討するとともに、各視点において、既習事項の復習にも重点をおいた指導が必要である。

学力等把握のための学校としての取組

- ・ 「学習意欲調査」: 意欲面での実態の把握、変容を把握するため、「自ら学ぶ意欲のみなもと」「自ら学ぶ意欲の行動傾向」「自ら学ぶ意欲の感情面」の3つの要素に基づき、全7項目において、質問紙法による調査を実施した。最低値0ポイント、最高値12ポイントとして集計。7月・12月に実施した。(筑波大学助教授の桜井茂男氏の著書を参考)
- ・ 「NRT(集団基準準拠検査)」: 算数科の4領域において、通過率などの数値をもとに知識・技能面での実態、変容を把握するために実施した。平成15年1月と7月に実施。平成16年5月にも実施予定。
- ・ 「基礎計算力調査」: 算数科における四則計算の実態、変容を把握するために実施した。各学年の計算領域に絞り、理解の定着度を調査、6月に実施し、計算力の実態を把握した。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・ 授業研究会の実施
期日:平成15年11月18日
内容:宮城教育大学教授相澤秀夫教授を講師として招き、町内教職員を対象にした授業研究会、及び講演会を開催した。
- ・ リーフレットの配布
内容:今年度の研究の取り組みについて、リーフレットとしてまとめたものを全家庭、管内小中学校及び、県内学力向上フロンティア小中学校に向けて配布する。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 ■ 15年度からの新規校 □ 14年度からの継続校
- 【学校規模】 ■ 6学級以下 □ 7～12学級
 □ 13～18学級 □ 19～24学級
 □ 25学級以上
- 【指導体制】 ■ 少人数指導 ■ T・Tによる指導
 □ 一部教科担任制 □ その他
- 【研究教科】 □ 国語 □ 社会 ■ 算数 □ 理科
 □ 生活 □ 音楽 □ 図画工作 □ 家庭
 □ 体育 □ その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 ■ 有 □ 無